

満州

私の歩んだ道！

北海道 高橋 敏子

はじめに

敗戦から五十六年、すっかり年老いてしまった私に、今になっていきなり満州からの引揚げで苦労した体験をつづって欲しいというお話がありました。当時のことを思い出そうにもすっかり記憶は薄れてしまい、また、今更に思い出したくもないというのが、偽りの無い心境でした。

大正、昭和、平成と私の歩んだ八十四年は、いろいろと家庭的にも苦勞の多かった人生で、昔を考えると

涙が先に立ち、つづることにはためらいを感じました。

しかし、あの太平洋戦争のような残酷なことを二度と繰り返さないよう、世の人、特にこれからの世代の人によく分かってほしいものだという思いも強く、薄れかけてきた記憶をたどり、書きつづってみようと思いついてペンを取りました。特に、満州からの引揚げを体験した悪夢のごとき出来事は、私の人生の中で忘れようにも忘れられない心の痛みです。

海外移住前の生活

私は、大正五（一九一六）年も押し詰まってきた十二月に、東京で岩瀧家の三人姉弟の長女として生まれました。家は雑貨商を営んでいましたが、父は電車の運転士をしていて、何とか人並みの生計を立てていました。七歳のときにあの関東大震災が発生して、我が

家はもちろん東京一帯が大被害を被りましたが、そのときの恐怖心は七十七年が過ぎた今日になっても忘れられることはありません。余談ですが、戦後北海道に渡ってから、十勝沖地震、釧路沖地震、そして釧路東部沖地震と大きな地震に三度も見舞われましたが、あの関東大震災には遠く及ばないもので、関東大震災ほどの恐ろしさは感じませんでした。

大震災後もしばらくは東京で、それこそ「狭いなながらも楽しい我が家……」の歌のとおりにささやかで平和な家庭で育っていました。そのうちに父は病気になるって、運転士としての仕事ができなくなり、父の実家の岩手県胆沢郡前沢町に帰りましたが、私が十四歳のときに亡くなりました。父の看病の疲れもあって、間をおかずに母も死んでしまいました。私と妹は、一関市の呉服店で働きながら弟の面倒を見ていました。当時の手当ては一カ月五円でした。

数年後、この呉服店の親戚の方が「満州の武装移民団の人がお嫁さんを探しているが、どうかねえ……」と、私に話を持って来て勧めてくださいました。昭和

九（一九三四）年のことでしたが、その当時は満州は広くて良い所だという評判を聞いていましたし、結婚しても百姓はしなくても良いなどとも言われましたので、学校は中途までしか出ていないし、これといった技能もないし、そのうえ百姓仕事もできない私なので、単純にこれは良いお話だと考えてしまい、すぐに結婚を決めてしまいました。主人となる相手の高橋俊平は当時二十六歳で、私は十九歳でしたが、お互いに写真だけのお見合いで話ほとんどん拍子で決まってしまうしました。

その年の九月に、私を迎えに来た主人と初めて顔を合わせたものでした。後に、「大陸の花嫁」などと言われて盛んに持てはやされ、写真などで広く紹介され、当時の若い女の子をにぎわした開拓団員の結婚の話も、このような決め方で結ばれた夫婦も多かったのです。

迎えに来た主人は、すぐに満州に戻らねばならぬということ、慌しく毎日を過ごしていました。結婚式もごく簡素にして、昭和九年九月下旬に渡満しまし

た。

岩手県からは、小林清さんの奥さんと一人息子の隆興君、それに主人と私の四人だけで、汽車で新潟に向かい新潟港から船に乗りました。荒れた日本海を四日がかりの航海で、朝鮮の清津港に上陸、そこから北満のハルビンまで汽車の旅でした。

初めて乗った汽車の中は、何とも表現のできない異様なにおいで、生まれてから今日まで食べたこともなかった、にんにくのおいが臭く、特に鼻につきましました。車内には、今まで見慣れない異国人の満人が大勢乗っていました。汚れた支那服を着た日雇い労働者風の男女や、何年も風呂に入ったことがないような汚れた姿をした子供たちが、ごろごろしていました。車内の床に無造作に座りこんで、きせるで煙草をすばすば吸っている人が大勢いました。車内には便所が無く、列車が止まるたびに車外に出て、あちらこちらの建物の陰でしゃがんで用便をしている様子を見て、びっくりさせられたものでした。

お腹が空いたけれども、食堂車などは無く、車内に

売りに来る人もなく我慢をしていたら、主人がどこからか水とマントウを買って来て、食事を取った記憶があります。

弥栄村^{ミサカノ}開拓団での暮らし

ハルビンから松花江^{シヨウカワ}を船で下って、佳木斯^{チャムス}に向かいました。松花江は川ですが、その幅の広いこと、まるで海のように向こう岸はほとんど分からないくらいで、その広いことに驚かされました。渡った船も、今まで乗ったことも見たこともないような大きな船でした。その船の中で一泊して、翌日に佳木斯に着きました。

小林さんのご主人をはじめ四人の男の方が、銃を肩にして馬車で迎えに来て下さいました。これから十三里先の永豊鎮^{エイホウジン}までは馬車で行くとのことで、満州に来た実感を感じみじみと味わいました。途中では匪賊が出没していて、襲撃を受けることも予想されるということで、皆実弾を込めた銃を携行しているのだと聞かされて、びっくりすると共に、満州に来るのではなかったと後悔しました。そのうちにだんだんと気持ちさが落

ち着いてくると、やはり満州に来たんだなあという実感を再び感じました。途中、幸いに匪賊の襲撃に遭うことも無く、無事に目的地の孟家崗モンヂヤカンに着き弥栄村開拓団本部を訪ねて到着の挨拶をした後に、更にここから二里離れている岩手屯に送られました。

岩手屯部落は共同宿舎で、長屋式の建物ではありませんでしたが、住宅とはとても言えるような建物ではありませんでした。二十四、五人の開拓団の男性と、そのお嫁さん四人との共同生活がその日から始まりましたが、電灯は無く、代わりの石油ランプが薄明るく部屋の中を照らしていました。その有様を見て私は、すぐに物語に出てくる盗賊の住み家のようなものと驚いてしまいました。

翌日から女性四人が交替で、炊事当番に当たりました。本部から配給される米、麦、粟、高粱コウリヤン、玉蜀黍トウモロコシなどを使つての食事の支度です。主食は大きな支那釜で炊き、おかずは油味噌と缶詰で、味噌汁の実は切干し大根だけでした。月に一度くらいは、塩漬けのからがらした鯖サバや鰯イサナが配給になって、食卓をにぎわしまし

た。

炊事以外には、毎日、ランプの火屋ほや磨きがありました。だが、初めてのことで上手に磨くことができずに、割つてばかりいました。また、風呂はドラム缶風呂で、入るときに縁が熱くて大変に苦勞をしました。何もかも、初めての経験なので迷うことばかり多くて、それはそれは苦勞をしたものです。

翌年、昭和十年になると更に五人の花嫁さんがきて、岩手屯での共同生活に加わり、大所帯になっていきやかなり、生活にも楽しさが増してきました。

孟家崗一帯は、土地が肥えていて、無肥料でも作物はよく育っていました。私は百姓仕事の経験が無く、結婚しても百姓はしなくて良いと言われていましたが、実際にここに来たからには、そうも言つてはおられず、見習いながら夏には畑仕事を手伝いました。野菜も豊富に収穫するようになり、川では鮠ナマス、鮒フナ、岩魚イワナなどが面白いようにたくさん釣れて、おいしく食べたものでした。今考えてみると、当時では何よりの栄養源だったのだらうと思います。春雪が消えると、野山

堂を続けることができなくなり、閉店することになったので、主人がその跡を継ぐことになりました。農業経営は二人の雇人に請け負わせて、私たち夫婦は孟家崗に移って、食堂経営を始めました。素人でしたが、最初のうちはいろいろと苦勞をして失敗もありましたが、そのうちに慣れてきて順調に過ごしていました。食堂経営も三年が過ぎたところに主人が病氣になり、孟家崗では治療ができないとのことで食堂を休業して、郷里の岩手県一関の病院に入院しましたが、半月あまりの後、治療のいかにもなく、とうとう亡くなってしまいました。昭和十五年十二月のことでした。二、三カ月は、死後の整理などで岩手にいましたが、翌年の春に再び渡満して、元の弥栄村岩手屯に戻りました。

なぜ、私と長女の女二人連れで、あの異郷の地に戻ったのかと聞かれても、六十年も過ぎた今になってよく分かりません。でもよく考えてみると、実は亡くなった主人の実家では、長女を引き取るという話が持ち上がっていましたので、その惨めさから逃れたい

という気持ちと、私自身は既に両親を亡くしていたので、当時のまだまだ貧しい内地の生活に戻ることをしたくないという気持ちも強く、大陸であの広い土地があれば、子供と二人でも何とか生きていけるだろうという単純な発想から、再度の渡満を決意させたのだろうと思います。それとも、怖いもの知らずの度胸があったからでしょうか……。いずれにしても岩手屯に戻りましたが、新たな苦勞が次から次とたくさんありました。女一人の力ではどうしようもならないことで、岩手屯の菊地さん、小林さんの一家には、大変にご迷惑を掛けお世話になりました。

昭和十七年、知人のお世話で源蔵さんと再婚し、翌十八年には長男が誕生しました。主人は岩手県の出身で、満州開拓団の幹部養成のための、弥栄村基幹訓練所に入所中でしたが、畜産関係の知識に明るくかつ熱心な性質を見込んだ知人の方がお世話してくださいました。

再婚してからは、馬、乳牛、綿羊、鶏、それに蜜蜂を次々に飼って、それぞれの経営を徐々に広げて生活

も豊かになり、穏やかな楽しい日々を過ごしていました。乳牛頭数もだんだんと増えて、最初のうちは搾った乳を娘に持たせて、地元の分校に届けたりしていました。ところが、搾る量が多くなってからは、主人が毎朝早く、十キロメートルも離れている孟家岡まで出荷するようにになりました。最初のころは、背負ったり天秤棒で担いだりして運んでいましたが、孟家岡の弥栄共励組合集乳所までの道路は、粘土質の泥道で大変でした。雨でも降った後は、それこそ泥ねいと化してしまい、苦勞しました。そのあとは馬車で運ぶようになり、少しは楽になりました。主人の口癖であった、「乳と蜜の流れる郷」に向かって、一步一步近づいていました。昭和二十年の終戦時には、乳牛は十数頭になっていました。

しかし、昭和十九年ごろから戦争は激しさを増し、弥栄村にも召集令状がきて入隊する人が増えはじめて、何となく落ち着かない不安な日々を過ごすようになりしました。更に昭和二十年になると、「日本は戦争に負けるのでは？」といううわさが耳に入ったりし

て、ますます不安が募るばかりでした。そして七月になると、怖れていた主人への召集令状が届いたので。主人は、その夜に雇人たちを集めて「私が出征した後のことをよろしくお願いする」と頼み、岩手屯の数人の人と共に出発しました。「戦争の状況がどうなっているのか、主人はいつごろになれば私たちの元へ戻れるのか、これから先、果たしてどんな世の中になるのか」などと考えると不安な気持ちで、一人になると泣いていました。主人たちが出征したあとの岩手屯は、男の人が二人しか残っていませんでした。当時、団本部と各方屯との連絡は乗馬で回っていましたが、毎日空を眺めたり、乗馬のひづめの首に敏感になっていました。

引揚げ避難の状況

昭和二十年八月十一日早朝、乗馬で小林さんが連絡を持って来ました。戦争が激しくなって危険なため、一時南方に避難するので身の回りの物を持って、明朝弥栄駅へ集合するようにとのことでした。私は、米と蜂蜜、味噌、塩などを飯盒に入れ、衣類は子供の物を

主にして、八月というのに「ねんねこ」と「かめのこ」を防寒用に持ち、また戻って来るのだとの思いから、家の鍵は雇人に預けました。

翌十二日早朝に、私たちと隣の佐藤内午さんの家族五人は、雇人の馬車で弥栄駅まで送ってもらいました。弥栄駅の周辺は、夜の明けないうちから各部落の人たちが詰め掛けて、大混乱でした。駅に着いたらすぐ汽車に乗れるのかと思ったら大間違いで、待てども待てども乗る汽車はこなくて、とうとう夕方まで待たされました。太陽が照りつける暑い日差しの中で、行く先不明な旅立ちを待つ身の哀れなこと、そして不安な気持ちにかられていました。集まった皆さんも一緒に、この先はどうなるのか、運を天に任せるしかないという気持ちでした。中には、放心状態で座り込んでいる人もいました。

夕方七時ごろになって、やっと汽車が来ました。その汽車は屋根のない無蓋車でした。私は二歳になった長男を背負って長女の手を引いて、佐藤さん一家と一緒に乗り込みました。汽車の中は人と荷物で足の踏み

場も無いくらいでしたが、やっと親子で座る場所を作って安心しましたが、車内は幼い子供たちの泣き叫ぶ声で、話も聞き取れない状態でした。弥栄駅に集まった大勢の人たちが全部乗ったのでしょうか……。私たちの乗った列車は、長く長く連結されていました。

間もなく汽車は弥栄村をあとに発車しましたが、のろのろと走ったり止まったりして、佳木斯に着いたのは翌朝まだ暗いうちでした。普通は一時間半くらいで着くところを八時間近くも掛かったわけですが、そんなこともあとになって分かったことでした。佳木斯の街は、方々に赤い炎が見えて、まるで火の海のように、空は一面に黒煙に覆われてときどき大きな爆発音が響き、恐ろしい思いでした。

佳木斯に停車したので、軍属として勤めていた妹の消息を知りたくて、方々を駆け回り回って尋ねたところ、一足先に避難したと聞き安心しましたが、弟は軍隊へ入隊したらしく消息がつかめず、どうしているのか心配になりました。いつ佳木斯を発車するのか分か

らないので、時間を掛けて捜し歩くこともできずに、あきらめるしかありませんでした。

夕方になり佳木斯を出発しましたが、そのころから雨が降り出しました。無蓋車なので全身びしょ濡れになりましたが、雨を防ぐ物が何も無いのですから仕方ありません。次の日の昼ごろに雨は降り止みました。そのあとは晴天で、濡れた衣服が蒸れて体がおかしくなり、病気が出始めました。まず一番先に、乳飲み子がぐったりとして母親の乳を吸わなくなり、続いて二、三歳ぐらいの幼な子たちが病気にかかり始めました。混乱している列車の中で医者に診てもらうこともできず、なすがままに見守るだけでした。

家を出るときに持って来た食糧は、列車内の床の上の荷物の中で水浸し、濡れて蒸されていて食べることができずに、泣く思いで捨てました。それでも汽車が止まる度に貨車から降りて、飯盒で自炊をする人もありましたが、食べる物が無い人がほとんどでした。途中の駅で、男の方々の手配で炊き出しのおにぎりをもらい、むさぼりながら食べましたが、それも一日一個

ではどうにもなりませんでした。

スライカ 綏化収容所での生活

八月十七日、綏化駅に着きました。疲れた体で長い道のりを歩かされた末に案内されたのは、日本軍の飛行場の格納庫でした。コンクリートの床の上に、捨て来たむしろやアンペラなどを敷いて、雑魚寝のころ寝て数千人もの避難民が収容所生活に入りました。初めのころはだれが手配してくれたのか、米や高粱の炊き出しがありました。その後食糧は配給制になり、自炊をすることになりました。そのうちに、コンクリートの床の冷たさは北満の九月では体力も限界になって、幼児たちが次から次と衰弱していき、三、四歳児の三百人ぐらいの子供たちが犠牲になりました。夜になると収容所内のあちこちで御灯明がとまり、読経の声が聞こえていました。

綏化の収容所では、約一カ月間収容されましたが、その間にここで日本の敗戦を聞きました。日本が戦争に負けるとは思ってもいなかった私は、弥栄村にはもう帰れないのだという失意と、絶望を感じました。飢

餓に耐え、なんとしても生きて日本に帰りたいという思いの一念でした。

寒さに向かい、我慢と耐乏の避難生活をしているうちに、長男が高熱を出して、あつという間に亡くなってしまいました。麻疹はしかから更にジフテリアにかかってしまったのです。医者も看護婦もいましたが、ただ診察するだけで肝心の薬が無いのです。薬が無いのならばせめて私の血液でもと輸血しましたが、何の効き目も無く、手の施しようも無いままに息を引き取ってしまったのです。岩手屯の三歳以下の子供は、ここではほとんどが亡くなりました。街へ行き茶箱を買って来て、長男と同じ日に亡くなった四人の幼児の亡骸を、大きい子に小さい子を抱かせるようにして納め、男の人に手伝ってもらって近くの土手の裏に埋葬しました。まことに哀れなお弔いでした。綏化の収容所の空き地には多くの遺体が埋葬されましたが、ほとんどの遺体はそのあとになっても供養されることもなく、遠い満州の奥地で長い歳月を寂しく過ごしていることを、忘れることはありません。戦争に負けた結果かも

しませんが、その償いがこの幼い子供たちの犠牲によって済まされているとするならば、本当に悔しくて残念なことです。

戦争に負けて軍隊が消滅したために、召集されていた男性の方々が戻って来ました。自分の家族の避難先を、捜し求め尋ね歩きながら綏化まで来て、ようやく弥栄村からの避難集団に巡り合ったのですが、肝心の主人の姿はありませんでした。戻った人たちに主人の消息を聞きましたが、知っている人はいませんでした。うわさでは、ソ連軍の捕虜になった兵隊はシベリアに連行されたということでした。そんな話を聞くにつけて主人の身が案じられて、夜になっても眠ることができずにいましたが、私ではどうすることもできず、ただ無事戻ることを願うのみの毎日でした。

一カ月あまりで綏化格納庫での収容所生活は終わり、九月半ばに家畜積込車に乗せられ、大連に向かいました。九月に入ると朝夕の寒気が身にしみるようになり、このままここにいたら、もっと多くの犠牲者が出ることを心配した幹部の方たちが、ソ連軍の偉い人

にお願いして南下することが認められたとのことでした。いずれにせよ、防寒衣類の準備が無い人々にとつては、地獄で仏に会うような気持ちで、緩化から南下する列車に乗りました。

約一カ月の緩化での避難生活で失ったものは、いとしい我が子、そして十数年の歳月に夢と希望をかけて、営々として築きあげてきた弥栄村に戻れなくなつたことでした。特に、私の心に残つた大きくて深い傷跡は、我が子を死なせたことでした。主人が戻つて来たときに何と詫びればよいのだろうか、そんな思いを胸に緩化を後にしました。

大連に向かう途中、列車が止まると満人が襲つて来たり、ソ連兵の暴行を受けたりして、貴重品を略奪されてしまいました。敗戦国民の情けなさから抵抗することもできずに、惨めな有様でした。ほとんどの人が腕時計、懐中時計、指輪や万年筆、そして取られないように隠していたお金も探し出され「ダワイ、ダワイ（よこせ）」と持ち去られたのです。中には、着替える衣類まで奪われ、着の身着のままになつたお気の毒な

人もありました。

幼い子供たちが車中で亡くなると、汽車が駅に止まっているわずかな時間の間に、ホームの片隅に埋めたりしましたが、ときには心を鬼にして置き去りにする母親もいて、それを見るのは悲しいことでした。また鉄橋を渡るときには、幼児の遺体を川に投げて水葬にしましたが、そのときの母親たちの気持ちを言い表すことはできません。本当にこの世の地獄でした。

山の中で一時停車すると、買出しや洗い物などで大変でした。飯盒で炊飯をする人、飲み水を探し歩く人、途中で急に汽車が動き出し、乗り遅れて泣き叫ぶ人、乱れ狂つてしまう人、人、人……、今思い出してみてもぞつとします。列車の中でのトイレもままならず、車中の片隅にバケツを置いて用を足し、いっばいになったら窓から投げました。女の人も恥ずかしいなどとは言っておられない、極限状態の逃避列車の旅だったのです。

大連実業学校での收容生活

十日くらい掛かったのでしょうか、ようやく大連に

着き、駅から一列に並んで何時間も歩かされました。心も体も疲れきって歩くのもやっとでしたが、この浮浪者のような行列を目にした大連在留の日本人の方々、のちに心温まる食糧や物資を支援して下さったのでした。着いた所は大連でも大きな施設で、大連実業学校でした。教室が宿舍に充てられ、一教室に十家族ぐらいが一個班として入りました。私たちの班は、菊地さん、小林さん、佐藤丙午さん、中屋敷さんほか岩手屯の人たち十二、三家族が同室になりましたが、足を伸ばしてゆつくりと寝ることができたのが何よりの喜びでした。早速、大連市内の日本人町内会や各県人会の方々からにぎり飯や食糧品、そして救援物資が配られ、弥栄村を出てから初めて落ち着いてお米のご飯やおにぎりを頂戴し、温かな布団に入って眠ることができました。北満からの避難民が大連駅からぞろぞろと列をなして歩く悲惨な姿を見て、食糧や衣類・毛布などを援助して下さいた在留日本人や、日系の大連市民の好意に、感謝の気持ちでいっぱいでした。

大連に着いて一週間ばかり暮らしてみ思ったこと

は、この街では戦争の影などほとんど感じられないほどの美しい街並みと、平穩そうな市民の暮らしぶりでした。ハルビンや佳木斯、そして弥栄村などの北満に比べて気候は温暖で過ごしやすい所で、いち早く大連まで南下したことは、私たち避難民にとって不幸中の幸いであり、このように取り運んでくださった弥栄村幹部の方々のお導きのお陰であり、心から有り難く感謝しなければならぬことでした。

一カ月半もかけた逃避の旅もこれで終わり、ようやく日本に帰ることができるという期待感の溢れる気持ちになったのも束の間、すぐにでも日本に帰れるという見込みはないことが分かり、大連で冬を越す覚悟を決めました。衣類などの救援物資の配給はありました。が、働いて手にした労賃は食べるために使ってしまう、越冬の準備に回すお金はありませんでした。

収容所本部から配給の高梁や玄米少々では不足で、これでは親子とも飢え死にしようと思ひ、働きに出ました。日系人の家へ住み込みで行くことになり、長女は同じ班の菊地さんの奥さんに頼んで預かってもら

らい、一週間に一度食べ物を持って、収容所の子供の所へ帰る生活が続きました。また、ロシア人の家に洗濯や掃除の仕事に行き、ロシアパン（黒パン）をもらって食糧を得ましたし、満人宅にも働きに出掛けて野菜をもらって来て食べました。満人もロシア人も、皆親切にしてくれました。避難の途中、各地で私たちが迫害した同じ民族の中にも、温情の人々がおられたことは心の救いでした。

こんな最中、思いもかけず突然主人が目の前に現れました。十一月の初めで、もう真冬の寒さが感じられる時期でした。「軍隊を脱走して、弥栄村の仲間五、六人と新京（長春）から汽車に乗り大連に向かったが、途中で足止めされ、隠れて石炭車の中に潜り込み、何日もかかり皆がいる所を捜し出してきた」と話してくれました。主人が戻って来て本当に嬉しかったことと、こんなにも心強い気持ちになったことはありませんでした。もうすぐ真冬だというのに、靴といえど指先だけの地下足袋、ぼろぼろの軍服には茶碗一杯ぐらいもある虱が巣くっていたし、頭髮も、顔のひげ

もぼうぼうに伸び放題でした。私たちのもとへ戻った主人は十日ぐらいたってから、逃避中の疲れと栄養失調で寝込んでしまい心配しましたが、一カ月ほど静養しているうちに元気になったので、ホッとしました。体調が良くなると、早速仕事を探して働きに出掛けることになりました。

仕事は町の中のマンホールの人糞尿の汲み取り作業で、仲間四人一組で夜中一時から朝八時までの重労働でしたが、おかげ様で親子三人何とか生活することができるようになりました。時には本部からの指示で埠頭の使役に出ることもありましたが、主人はこの仕事を引揚げまで続けました。「きつくて疲れるし！」と言いながらも労賃が良かったこと、辞めたら次の仕事がなかなか見つからないなど、一家の生活を支えるために主人には申し訳なかったけれど、一生懸命働いてもらうしかなかったのです。

ご主人が召集されたまま戻られないご婦人方は、女手一つの働きでは家族数の多い世帯では食べていくことも難しく、育ち盛りの幼な子が「腹減った、腹減っ

た」と叫びながら死んでいく哀れさは、本当に生き地獄を見る思いでした。こんな環境状態の中で、栄養失調と不衛生からの病気で死んでいく子供はここでも少なくありませんでした。また、思い出したくない悲しいことですが、「背に腹は代えられぬ」と子供を食糧品やお金と交換して、生き延びてきた人もいました。一人の子を犠牲にしても、残った子供たちを救いたい母の気持ちは痛いほど分かりますし、生死の境に直面した人たちの考えたことは、紙一重の差しかなかったと思います。戦争が残した重い罪です……。大きな過ちです……。

実業学校の裏山（転山と言っていました）には、毎日多くの死骸を埋めました。大連に着いた九月末ごろは、まだ山肌を掘って埋葬することができましたが、冬になって土が凍り出すと深く掘ることができずに、死んだ人の亡骸は、やっと浅く掘った穴に埋めて上に薄く土を掛けるだけでした。あとから満人が掘り返して着衣を剥ぎ取ったり、犬がほじくり出すなど見るも無残な光景でした。何カ月もたたないうちに埋め

る場所が無くなり、学校の車庫や倉庫だった地下室に放置するままになっていましたが、この地下室は外から自由に入れるようになっていたため、形見の遺髪・遺爪を取った後の遺体を放置していたとのことでした。

実業学校本館の立派な地下室は病室として使われていて、病気になる伝染を防ぐためだけに地下室に移されましたが、そのまま戻らない人も多くいました。同室の岩手班でも十数人がこの地下室で亡くなりましたが、そのほとんどが幼い子供たちであり、地下室に移されることは「死」につながる感じを持ちました。しかし、お産で入る人もいましたが、この人たちは皆元気に戻りました。しかし、産後すぐ栄養不足で息を引き取る赤ん坊も多かったようです。綏化の収容所周辺と同様に、大連実業学校の裏山（転山）にも多くの犠牲者の遺体が眠っていますが、遺骨収集もできぬまま五十数年がたつてしまいました。

大連に着いて一年過ぎた昭和二十一年九月ごろになっても、引揚げ開始の音沙汰も無く、もう一冬越さ

ねば帰られないのかと覚悟を決め、越冬の準備を始めました。そんな折、やがて日本に帰ることができるといふ知らせを聞き、天にも昇る心地で喜び合いました。ところがその喜びの矢先に長女が赤痢にかかり、あの本館の地下室に隔離されてしまいました。主人と共に、一日も早い回復を祈る毎日でしたが、幸いにも体力があつたため最悪の事態にならずに済み、元気に退院できました。また幸いなことに、引揚船の入港が一カ月近くも遅れたお陰で、親子一緒に帰国することができたのでした。

満州との別れ、引揚げ

十一月中ごろ、引揚げの指示があり埠頭に集められました。引揚船が入港せず、寒い埠頭の倉庫内で毎日毎日入船を待ちました。この埠頭に来て乗船を待ちながら亡くなった人もいましたが、悔しい、悔しい、お気の毒なその気持ちをお察し致しました。

十二月三日、待ちに待った引揚船がやっと入港しました。これに乗れば日本に帰れるんだ！と、夢のような思いで乗船、待ち焦がれた出帆がもう目の前でし

た。この時の胸の高鳴りは今も記憶の中に残っています。

昭和九年に渡満してから十二年間、希望に燃えて暮らした弥栄村岩手屯の生活や現地満人との信頼しあつた付き合いなど、日満両国民が分け隔てなく交流した豊かな開拓農村の生活が思い出されます。また避難指しを受け、慌ただしく支度して集合した弥栄駅、そして一カ月を夢中で過ごした緩化飛行場格納庫の収容所生活や、避難途中の列車内の惨状、更に一年三カ月にわたった大連の避難民生活を振り返ると、暴民やロシア兵の略奪や、飢えと病気で苦しんだことが、走馬灯のように脳裏に浮かびます。

十二月八日、長崎県佐世保に上陸、一時間くらい歩かされ引揚者収容所に入り、検疫でDDT消毒を何回も浴びせられ頭から足の先まで真白になり、その後久しぶりの入浴でたまりにたまった垢を洗い落とし、身も心もすっきりとして食事のモチモチを受けました。お米のお粥を頂戴して、こんなにもおいしいものなんだ……と嬉し涙が止まりませんでした。やっと日本の

土を踏んだ感激と、引揚者への温かい歓迎と接待を受け感無量、心から感謝の気持ちを表します。有り難うございました。

何日間か収容所でお世話になり、疲れを癒したのち各県別に分かれて故郷へ……。あの地獄のような避難生活で生死を共にした弥栄村の仲間たちとの別れは、とても悲しく淋しい名残り惜しいものでした。生きて再び逢うことがあるかどうか……、お互いにそんな気持ちで故郷に向かったのです。

日本の国内も敗戦で人の心も荒廃して、列車も窓から出入りしたり屋根に乗ったりで、運行時刻も不正確、佐世保から故郷岩手県一ノ関まで二日くらいかかったように思いました。一ノ関の義姉の家に身を寄せてしばらく厄介になりましたが、白米のご飯に魚の煮物を出されたときは、ただ嬉しい気持ちともったいないという感謝の念で喉を通りませんでした。

帰国の後、北海道の開拓へ

故郷岩手県に落ち着き、十二年ぶりのお正月を迎えました。が、お客様気分です。いつまでも親戚のお世話にも

なれず、身の振り方を考えなければなりませんでした。主人は、何としても農業をもう一度やりたい気持ちで岩手県庁へ行き、開拓地探しを相談したところ、満州開拓で指導を受けた中村孝二郎先生たち一行が、北海道東部の標茶町^{ヒョウチャ}へ現地調査に行くことを知りました。早速連絡をとって頂き、同行の許可を得て、新天地を目指し調査に参加しました。

中村先生、福本先生他二人の方と一緒に、昭和二十二年二月標茶町に到着、積雪の上をスキーで踏査しました。満州と変わらぬ平地が多く広い所であることに満足し、この地区に入植することに決めたのださうですが、ただ一面の雪野原で土地の凸凹が良く分からなくて騙されたとあとに話していました。

昭和二十二年四月十一日、北海道緊急開拓者として郷里岩手県一ノ関を発って、標茶に向かいました。岩手県より六戸、満州引揚げを共にした菊地さん、佐藤丙午さんと一緒に、家族総勢十七人が十三日標茶駅に到着、役場係員の案内で多和にある軍馬補充部隊の馬小屋に入所しましたが、夜は乾草を敷いて牛や馬

のようにして一夜を過ごしました。主人たちは、翌日から十キロメートルも奥地の入植地まで歩いて往復し、共同宿舍の建設に取り掛かりましたが、一カ月ほどで宿舍ができ上がり、それまで過ごした多和の仮宿舍から現地に移り、共同生活が始まったのです。北海道釧根原野の原始林を伐り開いて開墾を始めましたが、最初は人力、次は馬によって畑起こしの作業にかり、まず野菜の種まき、次いで自給食糧となるジャガイモ・蕎麦などを作付けしました。こうして開拓初年度の秋の収穫期を迎えましたが、自給量確保はできず、冬期に炭焼きをしてお金を稼ぎました。一年間は共同生活を過ごしたあと個人経営に分かれ、配当地二十町歩の中に仮小屋を建て移り住み、開墾、炭焼きをして食糧や経営費用を作りました。

昭和二十四年、主人は生活食糧にと乳牛一頭を購入し、その乳牛が増えて酪農経営に入ることができました。昭和三十年には搾乳頭数も増加し乳量は百トン台に、ビート、種イモ、デントコーンなどを作付けし、一年一年経営も楽になってきました。

昭和三十四年、長女に婿を迎え孫娘二人が生まれ、経営も一段と落ち着いた矢先に、主人が胃癌で他界、四十九歳でした。引揚げから一息もつかず、新天地で大酪農家を夢見て努力した主人だったので、私は胸が引き裂かれる思いでした。

その後、長女夫婦が頑張り、機械の時代に変わり経営も順調に拡大し、九十頭の乳牛を飼養、生産乳量も二百トンを超える大型経営も軌道に乗り一安心する間もなく、長女の夫が昭和五十三年心筋梗塞で他界しました。亡き主人が望んだ酪農経営がようやく花開こうとしたときに、このような悲運に見舞われ、一時は酪農まで考えましたが、二年後に孫娘に婿を迎え、何となく不自由ない経営と生活を送っていました。ところが不運はどこまで続くのでしょうか、平成四（一九九二）年には孫娘の夫も急死、打ち続く不幸に心身ともにすっかり疲れ果てました。私と長女、そして孫娘二人と、残された女四人での酪農経営は不可能となり、平成六年離農して弥栄を離れ、標茶町麻生に住宅を新築し、八十四歳でやっと静かで幸福な日々を送れるよう

になりました。

昭和六十三年に、長女が「弥栄会友好訪中追悼の旅」に参加し、十二日間にわたり引揚げ逃避行の途をたどり、亡くなった方々の慰霊を営むことができたことは、以前からの私の心からの願いでもあったので、これで肩の荷がおりた思いでした。しかし、満州の地には今だに大勢の人が眠っており、戦争の犠牲となり残留している人も多く、まだまだ戦争は終わっていないのです。

私の生涯は、青春時代も無く、異国で苦勞の末、敗戦、避難、引揚げ、そして新天地北海道開拓と、苦しみ連続だったように思います。しかし、いろいろな体験を味わい歩んできたことの結果として、現在の幸福な生活があるのだと感じる今日このごろです。

満州引揚げ労苦の思い出

北海道 柰 ステ

はじめに

敗戦から五十数年もたった今になって、満州から引き揚げてきたときの労苦を書いてほしいというお話がありました。命からがら避難した悲惨な体験は、正直なところ思い出したく無い気持ちが強かったので。しかし、お話を聞いているうちに、あの戦争がいかに無意味であって、その結果がいかに残酷なものであったかを、次の世代の人たちに書き残し、語り継いでいく必要があるという言葉に、私たちには、その役目と責任があるのだと思いました。そうしてようやく、粗末な文章でもよいから書いてみよう、決心をしました。

一 生い立ちと渡満の動機

私は、大正六（一九一七）年三月一日に、新潟県中